

野幌から消えたアオサギと減るクマゲラ

—消えたアオサギの謎とクマゲラ—斉調査の記録—

松 山 潤

まつやま・じゅん
野幌森林公園を守る会

本文の要旨

毎年三月末になると、野幌の上空をアオサギが舞い、春の訪れを告げる風物詩といわれたものである。アオサギの飛来を農作業の目印にしていた農家も多いという。そのアオサギが姿を消してから三年たった。また、野幌では比較的よく見られたクマゲラの姿も近年目にする機会が減ってきている。そして、大沢園地のシンボルともいわれたアカショウビンは野幌では数年前に絶滅したといっても過言ではない。このような鳥類相の変化の経過や原因はなかなかはっきりしたことがわからない。調査そのものが不十分だからである。その不備を補うべくささやかながら継続されている調査や記録をまとめ、今後の検討の参考にしたいと思う。なお今回は、アオサギの調査を中心に、クマゲラに関しては平成十三年度調査が第十五回にあたることから、調査後に別の機会にまとめ発表したいと考えており、今回は過去の記録の一覧に止めたい。

〈クマゲラ—斉調査の過去十四年の記録〉 確認数

一回	一九八七年	五〇六
二回	一九八八年	二
三回	一九八九年	五〇七
四回	一九九〇年	二〇三
五回	一九九一年	二
六回	一九九二年	二
七回	一九九三年	〇
八回	一九九四年	二〇四

九回	一九九五年	二〇三
十回	一九九六年	三〇四
十一回	一九九七年	二
十二回	一九九八年	〇
十三回	一九九九年	三
十四回	二〇〇〇年	二〇三

【調査時期・調査方法】

毎年三月のクマゲラの繁殖活動が活発化する時期に、林内が堅雪で調査し易さを考慮して、第二日曜日に開催されている。入林許可をもらい毎回市民一〇〇名程のボランティア参加で実施されている。林内を五〇〇m四方のメッシュに区切り、全メッシュに調査員が入り、約一時間耳と目でクマゲラを調査する。幸い多くのご参加を頂き毎年全メッシュに漏れなく調査員を配置できている。



野幌では絶滅したアカショウビン

判定の基準は目視によるものを第一とし、鳴き声での確認は二次的なデータとして扱っている。

【過去の記録の考察】

詳しくは別の機会に譲りたいと思うが、大きな傾向としては近年の低め安定化傾向が見られる。三回目までは五〜七という数も記録されているが、四回目以降はそれだけの数は一度も記録されていない。原因などについては不明である。毎年、巣立ち雛の行き先や、他地区からの入り込みといった可能性の問題など検討しなければならない課題も多い。また、森林施業や林相の変化、それに伴う餌の問題、利用者の増加やカメラマン・山菜採り、森周辺の環境変化、移入動物など多角的に検討評価しなければならない課題も多く、今後に向けて取り組んで行きたい。



観察記録の減っている天然記念物クマガゲラ

〈野幌から消えたアオサギ〉

アオサギは、昔から野幌森林公園の南端北広島サギの森に集団で営巣し、その巣の数は二百数十に達し道内最大規模であり、公園のシンボルともなっていた。そのアオサギが九十七年春忽然と消えた。

一、消えた経過

一九九七年三月下旬

彼岸過ぎから例年通り渡ってきたのを確認

(コロニー隣の斉藤花園の証言)

四月十一日

公園事務所により一〇〇羽の営巣確認。

四月二十三日

いつも通りにコロニーにいるのを確認(斉藤花園)

四月三十日

巣が空っぽになっており放棄されたものと推測(公園事務所)。官民合同で対策協議会を結成。

五月〜六月

数度の現地調査。巣は空っぽであり、下に散乱した今年の卵の殻や落下した巣の残骸も多数見られる。営巣木の幹にアライグマの爪痕、近くの沢にも足跡が見つかる。原因究明と移動先の発見を報道機関の協力も得て行う。

秋期〜冬期

アライグマ除けのトタンを営巣木に巻きつける。

一九九八年三月下旬

アオサギ戻らず、各地に分散定着したもの

と推測。

二、移動先

① 札幌市清田区平岡「旧たくぎんの森」へ、大コロニー新設。

② 江別市内の河畔林へ、中コロニー新設。

③ 苫小牧市ウトナイ湖の既存の大コロニーへの合流。

④ 札幌市篠路、江別市八幡などの単独・少数巣の新設など。

(岩見沢市宝池での新設は、野幌からの移動と、幌向ダムからの移動と二つの可能性があり、どちらとも判断が出来ないため今後の検討が必要。)

三、影響を与えたと思われる要因

① 一九九七年四月 立命館高校開校

一年前から建築工事が始まり、四月開校。

工事中の騒音・車両の出入り等と、開校後の生徒・職員の通学・通勤、車両の増加、学校生活・部活等の生活音、照明など、トド山口

周辺に大きな環境変化があった。

② 車両の増加

上記の関連により、東七号・西四号を通る車両の増加。又、南幌方面の住宅造成進展に伴い、札幌への通勤早道としての利用も急増している。騒音・排ガス等が増加している。

③ 中川牧場の造成作業

サギの森に隣接する農地では、建設残土を受け入れブルにより造成作業が長年にわたって続けられている。牧場側の言い分では牧草地の造成となっているが、「産廃捨て場では

アオサギ *Ardea cinerea* (英名Gray Heron)

【形態】

全長約93cm、翼開長約160cm、日本産サギの中で最大。頭から頸は白くて、額の両側から目の上を通り後頭でつながる黒色帯があり、後頭の羽毛は伸び冠羽となる。背から上尾筒までは青灰色。翼の雨覆は大部分青灰色。風切の大部分は黒いが、三列風切とそれに近い次列風切は灰色。頸の前側中央には2～3本の黒い縦筋がある。胸側の腹は黒く、下面の他の部分は白い。嘴は黄褐色。足は緑褐色。若鳥は成鳥にくらべ頭部から頸は灰色をおび、背はやや褐色味が強く、全体に色彩が鈍く、後部の飾り羽はない。

【分布】

ヨーロッパの大部分、中央アジア、インド、ビルマ、中国、アムール地方、朝鮮半島、日本、サハリン、東部シベリアの一部などに繁殖し、南アフリカやマダガスカル島でも繁殖する。日本では全国的に分布し、留鳥または漂鳥。北海道では従来夏鳥とされてきたが、近年江別(20±)、苫小牧、十勝(100±)などで越冬する固体群が増えている。

【習性】

水田、湿地、広い川、河口や海岸の干潟などで魚をとるが、カエル、トカゲ、イモリ、ネズミなど小型哺乳類、昆虫類、ヘビなども食べる。浅水中を静かに歩いて餌を探し、見つけるとねらいを定めて、素早く捕らえる。干潟、川の中州、高い木の上で頸を縮め、片足で立って長時間休んでいることもある。飛ぶ時は、頸を縮め足を伸ばし、湾曲した翼をゆっくりと羽ばたいて直線的に飛ぶ。グァーという声を出す。

【繁殖】

高い木の上に巣をつくるのが普通で、マツや広葉樹の林に集団で繁殖する。本州以南では他のサギ類とともに巣をつくることも多く、その場合、アオサギは樹頂部に営巣する。外国の例では、地面に営巣することもある。近年道内での注目すべき例として、岩見沢幌向ダムでは、水面のブイの上で営巣を始めた。枯枝や太い植草を組み合わせて、外径60～70cmの大きな巣をつくる。巣の卵数は3～5で、4卵が多い。卵は青緑色、無斑、大きさは55～67mm×40～46mm。2日おきに産卵する。雄雌ともに抱卵し、抱卵日数は25～28日、巣立ちまでの日数は50～55日。

【見分け方】

大きさとツルと混同されるが、飛ぶ時にはツルは頸を伸ばすが、本種はZ字型に曲げているので識別できる。

ないか」「開発行為ではないか」との不信の質疑から、十年來警察・保健所・道議員・市議員・公園事務所による現地調査が行われている。

④ 産廃処理場

サギの森の南方1km以内に迫って、最終処理場(美園産業)と中間処理場(渡辺興業)、その他の処理場が数箇所公園に接している。春の早朝、真っ黒い煙りがちょうど南方からの風に乗って流れ、巣全体を覆い尽くして、漂っているのを見たことがある。アオサギにとっては大きなストレスと考えられる。

⑤ 人的影響

近年悪質カメラマンの横行は目に余るものがある。巣の下に長時間にわたって居続けることは神経質なアオサギに大きな影響を与える。巣の上空でアオサギたちが鳴き騒いでいる時には決まって下にカメラマンがいたという。

季節柄、山菜採りの時期と合致し多数の人が入る。普段見慣れた農作業の人には意外と警戒しないが、ササ藪から突如現れる山菜採りには鳥はびっくりする。

⑥ カラスの害

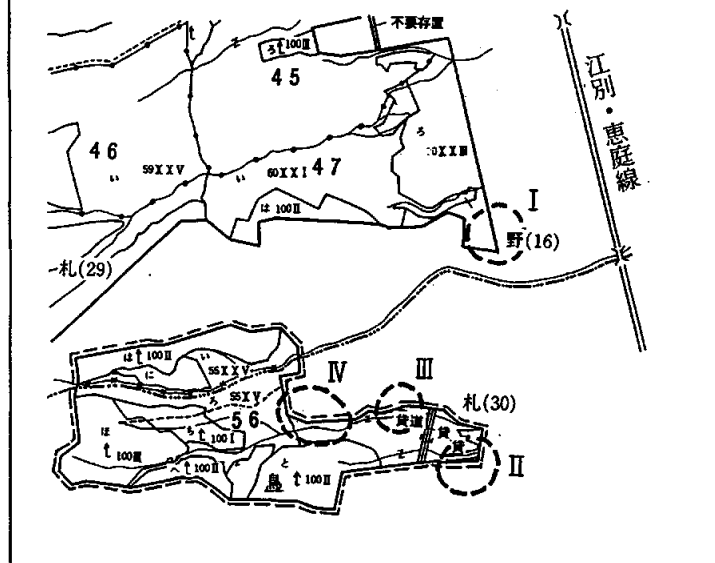
昔からカラスの被害は深刻なものであった。この一帯はカラスも多く営業中の卵や孵ったばかりの雛などが度々狙われていた。

⑦ アライグマ

公園内では九二年頃から確認され、近年は全域で生息。木登りもうまく、雑食性、鳥の巣などを襲うこともある。営巣木の幹に爪痕、近くの沢に多数の足跡があったことは事実。

(第1図) アオサギ 繁殖地移動図

- 凡例
- I 昭和19年まで
 - II 昭和20年より昭和32年迄
 - III 昭和31年より現在
 - IV 昭和41年より現在 (1996まで)



札幌営林局の調査報告書より

おそらくこれら七つの要因が複合的にアオサギにストレスを与え、徐々にそのストレスがアオサギにとっての許容限界に近づきつつある時に、何かひとつが引き金となって放棄に至らしめたものと推測される。報道的にはアライグマ真犯人説が広く流布されたようであるが、(もの言わぬアライグマに代わっていうと) 真の原因はそれほど単純なものではないと考えられる。

(なお、サギのコロニー移動の原因として、他にサギの大量の糞によるコロニーの営巣木の自体の枯死による移動があるが、野幌の場合においては、営巣木はまだしっかりしており、当てはまらないと考えられる。)

よると大正三年頃とされている。移ってきてからの移動の場所を、営林局の調査報告(七〇〜七二年)をもとに以下にまとめた。移動の原因について、報告書では、いくつかの要因のあるうち、人的な影響が大きいのではと、結論づけている。

【道内における近年の注目すべき動向】

(札幌営林局の調査報告書より)

六〇年代、北海道においては、野幌、苫小牧、野、厚真、浦幌、大栗毛、網走の六箇所にコロニーが存在し、それぞれ二〇〇〜三〇〇の大コロニーを形成していた。野幌を除いて、すべて海、大きな河川・湖に接している。アオサギは水域に依存することが多く、海に近いと、河川も太く大きく、干潟なども多く、餌場が豊富なことによるものと考えられる。それが八〇年代には、一〇数箇所に増加、九〇年代にはさらに急激に増加、五〇数箇所になっている。アオサギの絶対数が増加しているかという点、どうもそうではないらしい。少しは増加していると考えられるが、主に旧コロニー

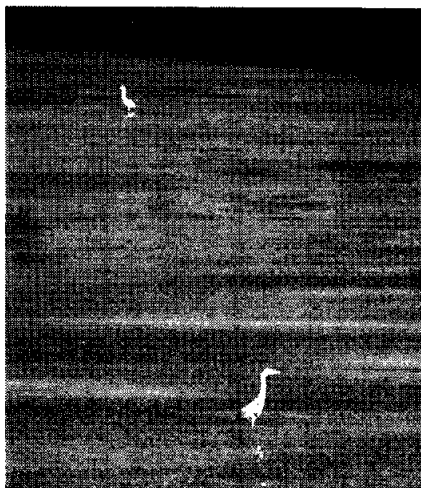
外国の文献にはサギの巣を襲った例もあり。ただ実際に木に登り巣を襲っているのを見た人はいない。また二〇m近い高さのオーバーハングになった巣を下から登って襲えるかどうか不明。しかし近くまで登ってきただけで、相当なストレス、パニックを引き起こす可能性も考えられる。

【結論】

以上七つの原因のうち、何が決定的であるか、対策協議会の討議においても結論は出なかった。

〈野幌での過去における移動記録〉

野幌森林公園のアオサギは、過去公園の内部で四回場所を変えている。もともとは現在より東南約一〇kmの千歳川沿いのヤチハンノキの防風林に繁殖していたものが、伐採により野幌に移動してきたといわれる。その時期は、古老の聞き取りに



アオサギのよく見られる江別市内の河川

の周辺地域への拡散であろうと考えられている。さらにコロニーの位置であるが、従来の海辺中心の場所から、次第に内陸に侵入していく傾向がみられる。この分散化傾向と内陸化傾向の原因についてははっきりしない。

又、近年の特徴として、北海道では本来夏鳥であったアオサギが、冬も多く残るようになってきている。江別、苫小牧、十勝地方などで顕著であるが、原因としては、冬でも凍結しない開水面が増加してきていること、孵化場など冬でも餌のとれる場所があることなどが考えられる。

更に、近年のアオサギの営巣木の樹種であるが、圧倒的に多いのがカラマツである。札幌平岡の旧たぐきの森のコロニーもカラマツである。おそらく戦後の皆伐の後に一斉に植えられた大量のカラマツが成長し、営巣に適した高さになったためではないかと考えられる。

【参考文献】

- ① 高野伸二監修『日本産鳥類図鑑』東海大学出版会、一九八一。
- ② 清棲幸保『増補改訂版 日本鳥類大図鑑』Ⅲ、講談社、一九七八。
- ③ 札幌宮林局『野幌自然休養林におけるアオサギ調査報告書』、一九七〇、七一、七二。
- ④ 畑宮清一郎「苫小牧自然保護序章―アオサギ営巣地を中心に―」、「郷土の研究・第六号」、苫小牧郷土文化研究会、一九九三。
- ⑤ 松長克利、北大大学院地球環境研、野鳥お勉強会発表資料。
- ⑥ 野幌森林公園を守る会、『クマガラ―これまでの活動記録とクマガラ一斉調査―』、一九八七。